

珠算文化史——川柳——

鈴木久男

目次

- 川柳の前身——前句付——
- 柳多留の刊行
- 俳句との相違
- 川柳の特質
- 川柳——数を詠める
- 九九を詠める
- わり声を詠める
- 加減算を詠める
- かけ算を詠める
- わり算を詠める
- そろばんを詠める
- そろばん玉を詠める
- 和算を詠める
- 錦帯橋を詠める
- 補
- おわりに

川柳の前身——前句付——

五七五の十七音で構成されている一種の滑稽文学に川柳がある。浜田義一郎はこれを定義づけて、江戸川柳 俳諧の末流である前句付に発して、それに内在するうが、ち・おかしみ・言葉あそび等の性質を拡充強化しつつ独立した十七字の短詩形文学。人間および人間の周囲のあらゆる事物の実体や矛盾・不合理などを機知的に指摘するのが特色、一時は狂句とも称された。^①

と述べている。

川柳と呼ばれるのは、浅草の童宝寺という寺の門前町に、柄井八右衛門という人が住んでおり、この町の名主をしていたが、号を緑亭川柳と云って前句付の撰者をしていた。彼は宝曆七年（一七五七）に萬句合を創刊した。「川柳評万句合」と題するこの摺物は、前もって、「祝ひこそすれ〜」「残念な事〜」というような前句を出しておいて、その後につく句（付句という）を募集し、その中から撰をしてこれを摺物にしたものである。

この柄井川柳が初代の川柳で、明和二年（一七六五）に吳陵軒可有（号は木綿）が、この万句合の中から、前句を省略しても意味のわかる秀れた句だけを約七百句選んで、小半紙型の本に仕立てて出版した。これが「誹風柳多留」の初編で、二十四編までが初代川柳の選である。以後代々の川柳が選をしており、天保九年（一八三八）までに一六七編が出ている。こうして柄井川柳の創始者の名をとって川柳と呼び、今日まで川柳（十七音構成の狂句）として続いているのである。

その川柳の前句付の一、二を紹介してみよう。「川柳評万句合」に、
十月には弘めぬ先の月を入れ

△前句▽祝ひ社すれ〜

がある。鈴木勝忠の校注、解によると②

作者 都 出典「川柳評万句合」八月二十五日開 解 妊娠期間は二百八十日とされているが、前の月経の後の、いつ受精したかは明らかでなく、結婚してすぐにできたとする、その前の月を入れなければ十か月に満たないことになる。「さすがに名人になると、お早い」などとひやかされながらも、最初の子供をもうけたことがうれしくて、

出産祝いをしているのである。十月は十月十日の意、弘めは結婚披露のこと。

金見せる客に貰うたためし無し

△前句∨ほんの事なりく

作者 名月 出典「川柳評万句合」十月五日開^③

金を見せびらかす男に限って、その金を使ったためしはないという。今も昔も変らぬ人情のうがちを、客商売の女の経験から出たような表現法が、妙に述べ懐めて、いかにも真実を伝えるような説得力をもつ。

去り状を能くく見れば女の手

△前句∨にくい事かなく^④

朝帰りむしやうに連をわるくいひ

△前句∨今が盛りじやく^⑤

二句とも解説するまでもあるまい。前句付が理解できよう。

柳多留の刊行

万句合の入花料は一句につき十六文で、寄句数は一回に最低二千五百句内外、最高二万五千句内外にも達したといわれる。それが一年に十三、四回もくりかえされたとすると、一年間の入花料はおびただしい額にのぼったわけで、川柳はかなり裕福な暮らしをしていたようである、^⑥という。

岩波文庫本は初代川柳撰の二十四篇までを五冊に、日本名著全集本は三十一篇まで、国民文庫本は四十五篇まで、目下三省堂から岡田甫の校訂で全巻複製の予定である。本稿執筆時十卷一三四篇が終っている。

初代川柳のころの江戸俳諧の代表は慶紀逸けいきよで「武玉川むたまがわ」が好評であり、宝暦六年までに十編を重ねたほどであったが、翌年川柳が前句付の活動に入り、同十二年に彼が死んでから川柳評の方へ支持者が廻ったのだそうである。その間の事情を、浜田義一郎は

宝暦七年八月 第一回 川柳評万句合 寄句数二〇七句、入選句一三句

五年後 第七、八、九回 寄句数一万句超

と述べている。^⑦

柳多留の序文に

さみたれのつれ／＼に あそこの隅 ここの棚より ふるとしの前句附のすりものをさかし出し 机のうへに詠る折ふし 書肆何某来りて 此儘まじに反古ほんこになさんも本意なし といへるにまかせ 一句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ なかんつく当世誹風の余情をむすへる秀吟等あれハ いもせ川柳かわやなぎ樽たると題す 干時こととき明和二酉仲夏 浅下の麓 呉陵軒可有述

とある。昔からの前句付と、流行の先端を行く武玉川が、妹背のように結びつくの象徴して、結納や婚礼の時の必需品「柳樽」（胴と柄が長く、朱漆で塗り、結婚などの祝い事に用いる酒樽）を題名とした。「当世誹風の余情」とあるのはその意味である。

前に述べた如く、二十四篇までは初代川柳の撰で、初代の死後一時衰え、二十五篇から再開して、天保の改革時ま

でに一六七篇を重ねた。刊行を表にしてみると、

明和八年まで (一七七一年) 六篇 初代川柳

安永九年まで (一七八〇年) 七、十五篇 "

天明八年まで (一七八八年) 十六、二十二篇 "

寛政三年まで (一七九一年) 二十三、二十四篇 "

寛政年間 (一八〇〇年) 二十九篇まで

文化年間まで (一八一七年) 七〇篇まで

文政年間 (一八二九年) 一一〇篇まで

天保九年まで (一八三八年) 一六七篇

となる。⑧ 初代の没年は寛政二年(一七九〇)で、川柳の名跡は二代目、三代目が初代の縁者、四代目が人見周助(幕府の同心)で「柳多留」を終刊した。

俳句との相違

川柳も俳句もともに五七五の十七音で成るのだが、著しい相違点は、

1 季語を必要としない。

2 切れ字(や、かな、けり)を考えないでよい。

ということである。

俳句は俳諧の発句の独立したものである。川柳は前にも述べたように、前句付の付句の独立したものである。

俳句が原則として季語（季節語）を入れるのに、川柳にはこれが必要ないのである。

かみなりをまねて腹掛やっどさせ 初篇

子が出来て川の字形りに寝る夫婦 同

のように、季節を暗示する言葉すらない。対象に人事や世相をおくからであり、取材の範囲は無限に近い。

役人の子はにぎくを能覚 初篇

母の手を握って巨燧しまわれる 同

どちらにも切れ字がない。前の句は役人の子は親である役人の収賄を知ってか知らずか、こぶしをつくったり開いたりをよく覚える。後の句は娘の手を握ったつもりが母のだったので、こたつをしまわれてしまった。と詠んだものだ。

自然や、季節感をうたう必要がないのも自由なことである。俳句が客観的に物を見ているのに、川柳は客観以上に傍観的なのも一つの特徴をなしている。

川柳の特質

麻生磯次の「川柳物語」^⑨によると、川柳の特質を細分して実証しているが、

地口、駄洒落（言葉のひびきを利用した洒落。例、五戒より和尚やっかい保ってる 柳樽35篇）

掛詞（高級な技巧をもった洒落。例、韓信といへばまたかと聞く異見、柳樽拾遺5篇）^⑩

古語・成句・諺などのもじり（是は百両と申す嫁にて候）^⑪ 柳樽17）

縁語の利用（夕立を四角に逃げる丸の内 樽拾1）

譬喩的な技巧（俄雨冬の蘇鉄の歩くやう 樽21、菰かぶりの人の歩くのと、冬の蘇鉄との連想）

擬人法（犬猫などの動作を人間に譬喩する。鶏の何か云いたい足づかひ 樽初）

擬物法（奥様の加勢立白なべのふた）^⑫ 樽初）

江戸ッ子の優越感（江戸物のうまれそこなひ金をため 樽11）

居候、不具者等への優越感（ばた餅のくせにきなこをたんとぬり）^⑬ 柳拾8）

武士生活の暴露（町人で質屋を出るはひどいこと）^⑭ 樽10）

僧侶の墮落暴露（どう悟ったか禅僧もためる也 樽11、大黒を祭る和尚は生ぐさし）^⑮ 樽42）

医者、学者を笑う（仲人にかけては至極名医なり 樽13、先生へいかゞと問へばそんなもの 樽9、論語よみ思案

の外のかなをかき）^⑯ 柳拾11）

性的暴露（女房があるで魔がさす肥立ぎは）^⑰ 樽初）

史上人物の卑俗化（木曾をだきしめ緋緘をねだる也）^⑱ 樽22）

凝固を笑う（国家老のような型に嵌った人物を笑うのである。国家老口をへの字にして座り 樽35）

吝嗇を笑う（尾がしらの無いのが伊勢屋の初鯉）^⑲ 樽17）

愛欲を笑う（女房をこはがるやつは金が出来 樽3）

不調和（美しい顔で楊貴妃豚を喰ひ 柳拾、親父まだ西より北へ行く気也 樽5）

無邪氣（抱いた子にたたかせて見るほれた人 樽初、暑気見舞枕と団扇持って逃げ 樽12）

素朴な人生哲学（昔から湯殿は智慧の出ぬ所 樽初、たゞも行かれぬが不沙汰のなり始め 樽7、孝行のしたい時

分に親はなし 樽22、相性は聞きたし年はかくしたし 樽6）

生活の断片図（うたゝ寝の書物は風が繰っている 樽6、雨宿りちよつくと出てはぬれて見る 樽13）

写実（団扇うり少しあふいで出してみせ 樽初）

人間の自然の姿（くどかれて娘は猫にものをいひ 柳拾8）

人間味（寝ていても団扇のうごく親心 樽初、まよひ子の親はしゃがれて礼を言ひ 樽2、旅戻り子をさし上げる

隣まで 樽初）

夫婦愛（里がへり夫びいきにもうはなし 樽初、腹の立つすそへかけるも女房也 樽3）

以上のように分け、暴露、皮肉、嘲笑だけでなく、蔽われたものを取り除いて、人間生活の真実を明らかにしようとする心持が、川柳になかったとはいえない。ことに人間本来の美しい性情をよんだ句などには、ほんとうに人生を祝福するような、朗らかに澄んだ笑いが感ぜられる”

と結んでいる。^⑩

浜田義一郎によれば、川柳の特色はうがちであるという。^⑪

うがちというのは、もとは穴を掘る、穴をあける意の動詞うがつであるから、表面に見えないものを掘り出す、あるいは、内部が見えるようにすることで、広辞苑はそれを「普通には知られていない裏の事情をあばくこと、人情

の機微など微妙な点を巧みに言い表わすこと」としている。しかし、がちの中でも「あばく」というような強い姿勢のものから、ごく弱いものまできわめて多様なので、以下にその諸相を見てゆきたい。

とし、人情の機微を訴えたもの、諺、自然観察、諷刺、川柳人間像（家族、社会）、技巧（パロディ、謎句）、詠史（歴史を詠む）句、に分けて解説している。

これを要するに、川柳は、

- 1 家庭生活
- 2 社会生活
- 3 歴史上の人物と事件
- 4 四季の生活
- 5 その他

と大きく分類することができよう。素材や用語の卑俗さ、着想、観察、表現の奇抜さが人をして「おかしき」を感じさせるのである。冒頭の浜田の定義にあるように、それは江戸川柳であり、江戸に生育した文芸なのである。

注

- ① 浜田義一郎編「江戸川柳辞典」東京堂 五二七頁
- ② 「黄表紙 川柳 狂歌」日本古典文学全集46 小学館 川柳三五〇頁 鈴木勝忠校注
- ③ 同前書 三七〇頁
- ④ 上掲書 三七六頁

- ⑤ 上掲書
- ⑥ 「川柳・狂歌」麻生磯次、小池藤五郎編 日本古典鑑賞講座 23巻 角川書店 四頁
- ⑦ 「川柳・狂歌」浜田義一郎 歴史新書 教育社 二〇頁以下
- ⑧ 「川柳狂歌集」日本古典文学大系 57岩波書店 杉本長重校注二二頁
- ⑨ 「川柳・狂歌」日本古典鑑賞講座 23巻 角川書店 二三頁
- ⑩ 柳樽拾遺「誹風柳多留」中に載せ洩した初代川柳の選句中から、さらに抜録したもので、最初「古今前句集」として寛政八年（一七九六）秋、蔭屋重三郎から発行したものを、のちに星運堂花久がその版木を譲り受け、享和元年（一八〇一）ごろ「柳樽拾遺」と改題上梓した部門別川柳集
- ⑪ 「これは伯良と申す嫁にて候」の謡曲のもじりで、持参金つきの醜い嫁を詠んだもの、奥様と妾のケンカに、尻の大きい下女（立白）、平べったい醜い女（鍋の蓋）が加勢すると詠んだ句、
- ⑫ ぼた餅は醜女、きなこは白粉
- ⑬ 刀を抵当に入れ、丸腰の町人姿で質屋を出てくる武士の生計不如意を笑った句、
- ⑭ 僧侶の女犯は禁じられているのに大黒（梵妻）を困う和尚を暴露
- ⑮ ラヴレターも漢文では書けない、恋は思案の外と云う、儒者も仮名でそれを書く。
- ⑯ 養生しなければならぬのに、女房あるが故について手を出して、肥立ち悪く、こじらせてしまう、という。
- ⑰ 巴御前は木曾義仲の妾、巴御前は景通の女房に卑俗化する。
- ⑱ 伊勢から出た商人は守銭奴が多い、尾も頭もない切身のなまりぶしを買う。
- ⑳ いい年をした親父が、西方浄土へ行くのでなくて北の廓へ行く執着を笑った句、
- ㉑ 「川柳・狂歌」日本古典鑑賞講座23巻 角川書店 川柳物語 麻生磯次五十一頁
- ㉒ 「川柳・狂歌」教育社 歴史新書82 浜田義一郎 三十頁以降

川柳——数を詠める

川柳の中には算数を扱ったものが可成ある。先に私は「珠算文化史——狂歌——」を発表したが、^①数、算数、九、わり声、加減算、そろばん玉、かけ算、わり算に分けて一一九首の狂歌を紹介した。

川柳は狂歌と違って五七五の十七音だから、三十一音の狂歌よりも短詩であり、言葉が省略されているだけに難解のものが多い。私が蒐集した柳句の全部に対して解説もしくは注をつけたのだが、到底浅学の私の手に負えないものがある。それらは単に紹介することだけに留めておき、他日完璧を期したい。以下狂歌と同じような分類で紹介することにしているが句数が多いからできるだけ簡単に記すことにする。

数を詠める

仲人口七百五十くらいまで 万句合 安五^② (嘘八百という)

二十五と四十二で込むわたし船 二^③ (男の厄年、川崎大師へ六郷を越えてお参りする)

百人の中へ一声ほととぎす 九 (百人一首、徳大寺左大臣の、ほととぎす鳴きつる方に……があるが、ほととぎすはただ一首しかない)

百人で九十九人は蛇におぢ 一三 (盲蛇におぢずという、百人一首で蟬丸ひとり盲人)

春宵一刻あたいは三步なり 一三 (春宵は一刻価千金につくが、一兩の四分の三、つまり三步で吉原の遊女が買える)

男十七女は三十一 一五（俳句で雨を降らせた其角は男、雨乞の和歌の小町は女）^④

ふじのゆめ三千五百九十巻 一六（三國一を数字読み）

九十九はゑらみ一首はかんがへる 二一（百人一首の選者藤原定家も一首は考えて入れた）

おや子して四十五人の下知をなし 二二（忠臣蔵の大石親子を除くと四十五人）

七十九男で二十一女 二四（百人一首の作者の性別）

日本から極楽わづか五十間 三六（日本堤から五十間道を行けば吉原大門Ⅱ極楽）

目うつりがすると三百間あるき 二一（吉原の廓内の五つの町、五丁町を女を選んで一まわり三百間）

人同じからず三步と二十四文 五三（遊女でも上妓は三步、昼三と違って一両の四分の三、夜鷹は最低で二十四

文）

一二の論に三法を四位が連れ 六九（数詞一〜四まで入れた）

二三年めて五両は安いもの 七七（二三年も味をしめて間男代五両は安いという）

三五九二一なれはこそ甘山 八〇（三國に一なればこそ、二十山は比叡山）

出るも六ツかへるも六ツの六あみだ 八九（彼岸の頃、江戸に散在する六阿弥陀巡拝が流行した。本木の西福寺、

沼田の恵明寺、西カ原無量寺、田端与楽寺、下谷常楽寺、亀戸常光寺で一巡り七里半、朝六時から夜十八時までかか

った）

三五九一二め上げて二十チ山 九四

五十四は石山百は小ぐらやま 一二九（源氏物語五十四帖は石山寺で、百人一首は小倉山で）

年子にニタ子みわたせば嫁苦勞 一三〇（数詞がうまく入っている。二三四九六）

とは知らず明かずの門へ九十九夜 一四三（小野小町は肉体に欠陥があつて男と契らなかつたという俗説がある。深草少将が九十九夜通つたという。小町針Ⅱ穴のない針、は小町の俗説からきている）

和のたから三十一に四十七 別篇下（三十一は和歌、四十七はいろは、Ⅱ赤穂義士、日本の宝）

十六をほうちるやうに両替屋 別篇下

貧と恋入ると四百六病也 別篇下（四百四病に貧と恋が入つて四百六）

四百づゝ両方へ売る仲人口 拾、一（嘘八百と云う。両方へ半々に売込むから四百づつ）

李太白一合づつに詩をつくり 拾、四（玄宗皇帝から呼ばれたのを詠んだ詩に、李白一斗詩百篇…がある。一斗で百篇だから一升で十篇、一合で一篇になる）

太夫しよく百で四文もくかららず 拾、六（太夫職に日蝕の蝕をかけている）

九十奴も二十四文も同じゆめ 拾、八（太夫の揚げ代と夜鷹の料金を比較し、どちらを抱いても夢は同じ）

客のあるたびたび叱る九人前 拾、十（一揃十人前の陶器を壊したため、箱から出すたび毎に叱られるという）

百の内色師はらからならんでる 筈^⑦一（百人一首の中に在原行平の「立別れ…」と在原業平の「千早ぶる…」がある。二人は兄弟で、業平は色師といわれていた）

九九を詠める

おそぼは二八おひねりは二六也 三七（二八十六でそぼは十六文、初穂料は二六十二文と相場がきまつていた）
人数は九九にあはねど義に叫ひ 三八（四十七士だから九九にはない）

八宗を八八六十余に弘め 六九（俱舎、成実、律、法相、三訓、華嚴の南都六宗に、天台、真言の平安三宗で八宗、これを日本の六十余州に弘めた）

丈け長をたつ時九九が用に立 七十

月雪と花で三苦の二十七 十七（月、雪、花を眺めるたびにあわれを感じる。三九二十七）

十式文鳩に三四の豆を遣り 八一（鳩に三枝の礼がある）

のびた奴二八の謎をぶっかける 八二（そば粉八割、麦粉二割のそば切、転じて一杯十六文の最低のそば）

急度した人も二八のそばが好き 八四（私しゃあなたのそばがよい、二八十六でいろか）

月の文二五の十世も書て出し 八六

仲直り五十番の近所にて 九十

底心は色に下戸なき三三九 九七

ハチ／＼としたは十露ばんしほりなり 九八（そろばん玉を並べたような絞り模様、手拭などに使われた）

蕎麦かすを隠す二八の厚化粧 一〇三（二八そばと顔のそばかすをかけている）

亀の寿に鶴は十羽で一とからげ 一〇五（鶴は千年、亀は万年、鶴十羽で亀の万年になる）

二十四になるは四六のわりあまし 一〇七

蛸のわび足も六十四重におり 一二六（一重の足を八重に折って詫びるといふ、蛸の足八本で六十四重）

四々の日にひらく上野の文珠堂 一一八

紋所も三三九代の北条家 一二三

二八の喰逃げ日高まで追っかける 一三〇（安珍清姫の道成寺？）

二四不同なかりし三五夜中の詩 拾、四

三五から夜中に出さぬ娘の子 六六、拾、四（娘も十五を過ぎると危険？）

五々廿五きれとしなの笑はれる 拾、十（信濃の農民は江戸へ出稼ぎに来るが、平常口にしない米が出るので大食した。この句は餅か？）

わり声を詠める

ぶちまけて四ツ手四しんが一ツ四也 一七（四手駕は竹製の駕。タクシーの前身。四進が一十のわり声がある）

米をとぐやうに五の段さらってる 三二（五の段のわり声は米をとぐような句だという）

七の段調布欠落てつちかけおちでもしたし 三五（七の段のわり声はむづかしいから）

九うしんが一ツしん足らぬ居候 三八（九進が一十は九の段のわり声）

秋一無冬そろばんとたはけ 四四（見一無頭作九一というわり声がある）

見ん一が上ったらばと小町言ひ 五一（一桁のわりさんを帰、二けた以上のわりさんを除という。これらができるようになったらと小町が云ったというのである。艶句と見てよかろう）

孔明は四百を三の段で割り 五二（諸葛亮、蜀の宰相、劉備を助けて呉魏に対抗した無双の軍師、劉備から三顧の礼をとられてやむなく出盧したという）

七の段人の寿命もわり切れず 六七

六一加賀様八一は廓の雪 七二、一二六（六一加下四は六の段、八一加下二は八の段のわり声、祿で一番は加賀様

という意か。八一は不明)

七の段小ぞう欠落でもしたし 八〇(類句)

天作の五穀に露の玉を置き 八九(二一天作の五は二の段のわり声)

劔一無刀町人の野辺送り 八九(見一無頭作九一のわり声から、町人の野辺送りには劔一つと死骸に、ほかには刀も無いことを詠んだ)

九の段の山天作の一夜出来 九四

添削のころに二一の土間は割れ 九五(天川屋儀平||四十七士の天野屋利兵衛追善の会の句、二一天作の五を利かした句)

日親が一心法をわり弘め 一〇一(「立正治国論」で、將軍義教を折伏せんと、永享十一年、一四三九に著わした)

劔一無刀さつきうの入替へ 一〇四

五山花山は盤の目の割りあまり 一〇八(五三加三が五の段のわり声、五山は京都五山、鎌倉五山、禅宗の五大寺)

天作の五穀は神の御賜もの 一〇九(前掲の類句)

魯智深が史進ではらふ酒の代 一一六(六進むちんが一しんは六の段のわり声)

わすれては打なくられる七の段 一一六(七三四十二、七四五十五、七五七十一、七六八十四となると九九と混同してむずかしい、わり声を忘れてしまうからである)

劔一無刀早急なひと工面 一二五

加減算を詠める

寄る計引く事のない年の浪 武、四（年はとりたくない、たし算ばかりだから）

きとうする夫婦の年は七十五 万句合 明和五（男四十二、妻三十三が厄年で、夫婦して厄除の祈禱に出かけたのである）

八十九兩三分の徳がつき 万句合 安永元（富札Ⅱ宝くじが当たった。奉納金十兩、富札が一分だから百兩から引いて八九兩三分、一兩は四分）

主の縁一世へらして相続し 初（主従は三世、夫婦は二世である。娘の婿になったから二世の縁になって相続するのである）

そろばんを二度手に取ると直なが出来る 二（商取引にそろばんが使われる。且那この位でどうでしょう。いや高い。ちゃあこれだと二度目で商談成立、現在でもある）

川崎へ六つちがいの夫婦ずれ 万句合 明和四（男の厄年は四二と二五、女の厄年は三三と一九だから、二十五と十九の若夫婦が川崎大師へ厄除け参りしたのであろう）

そば切が二十うどんが二十七 九（赤穂義士が本所松阪町の吉良邸前のそば屋で腹ごしらえをした。うどんが二七、そば切二〇を注文しただろうというのである。史実ではない）

五十七人は赤坂さしてにげ 一一（謡曲「熊坂」に、手下七十人のうち表に進む十三人同じ枕に斬り伏せられ、とあるから残った五十七人は赤坂へ逃げたというのである）

生きていやすりや廿五と七回忌 一二（娘が十九の厄年に死んだ。七回忌の法事に、生きていれば二十五になるはずだと詠んだ悲句）

百五十式まい多いをしまわせる 一五（歌がるたは、読札と取札で二百枚、四十八枚のめぐりだから一五二枚多いのである）

二十一さと三年の法事する 一七（前掲の句の類句、親の気持をよく詠んでいる）

涙にも少し間のある百ヶ日 一九（七七四十九日忌までは悲しみのうちに明け暮れるが、百か日のころになると涙を流すのにもひまがかかる）

三十八年いきのびて筆をとり 二一（論語に知命がある。五十にして天命を知るがこれで、八十八まで生き延びて米寿の年に一筆を所望されたのである）

むだよせをしてそろばんの直を付る 二二（前掲の類句）

いたい事帯と袴で十二両 二五（七五三の祝、七つの女の子に帯解、五つの男の子に袴着、合せて十二、うれしい悲鳴）

大師河原へつれ立つた七十五 三一（前掲の類句）

孝よりも忠義は二十三多し 三三（二十四孝と四十七士とでは二十三の差がある）

仕合は三世の縁を二世にする 三五（前掲と同発想。主従は前世、現世、来世にわたる縁、夫婦は現世と来世の二世の縁、親子は現世だけの縁である。雇われた青年が娘の嫁になる仕合せ者よと詠じた句）

さし引の九九は十露盤将棋盤 七五

むつ事はこれ三ツくの咄や 八二（三つと三つで六つ、密事とかける）

両方の二厘五もうで五りん出来 八九（五倫Ⅱ君臣、父子、夫婦、長幼、朋友。義・親・別・序・信を二つに分け

て二厘五毛としたのか？ 別の意か？

起てみつ寝て三つ蚤を六つ取り 八二（戦後蚤もいなくなったからわからない句となつてしまつたが、艶句の一種か）

尻からやりなと寄せ算の読直し 一〇四（現在なら縦計を出すのだから下からとなるのだが、大福帳では尻からとなる。艶句か）

首帳の寄算小西呼び出され 一一八

首帳のよせ算するに小西が出 拾、五

かけ算を詠める

十露盤の昼から違ふ三五の夜 武、五（八月十五夜の月見、気もそぞろでそろばんも合わぬ）

髪結も百に三つはほねを折り 初（散髪、当時の髪結、安いのは二十文、高いのは三十二文、三つで九十六文つまり百文で通用した。ざつとやれないから骨が折れるのだ）

掛り人五百両ほどかんにんし 一九（堪忍は五両といわれていた。居候だから堪忍のしどおし、百回も続けなければならぬのだ）

見たり見せたりで一両十匁 二六（芝居の棧敷は一マスが銀三十五匁、二人で七十匁、一両十匁。芝居を見たり、お見合で相手に見せたり、相手を見たり）

百四十一世重なる仇をうち 九五（天川屋儀平追善の会の句、主従は三世、四十七人が三世で一四一世）

客二つつぶして夜鷹三つ食ひ 一二（夜鷹は野外で春を売る賤婦。代金二十四文。客二人で四十八文だと、二八

そば十六文が三杯食える。このそばを夜鷹そばとも夜泣そばともいう）

泉岳寺塔婆は三百二十九 一一五（四十七士に七本づつ塔婆が上ると三二九本）

魂魄こゝろの九十四残る泉岳寺 一一六（靈魂、たましいは残る。四十七人の魂魄だから二倍で九十四）

九十四の足跡寺へ雪の朝 一一九（討入の日は大雪だった）

式百六十四文木戸へかつぎ出し 傍①、五（芝居の平土間^①切落し、舞台の前の大衆席は一人前一三二文、見物中に二人でケンカして追出されたので二六四文）

わり算を詠める

女房よろこべ手前にも二両式分 三八（姦通は大罪であった。内済料でさえ五両、一両は四分だから、二人で二両二分づつになるといって喜んでいるのである。現代流に云うといわゆるヒモ付）

けた割をして十露盤を掛直し 一九、八四

亀井算術をはづさぬ家老なり 九五（天川屋儀平追善の会の句。亀井算は現代の商除法に近い割算法）

十露盤の桁あたりまで割きれず 九五（天川屋儀平追善会の句）

亀井算わる子温公ほどの智慧 一二七

六引けば六出るコイツ亀井算 一三三

浪人の渡世浮木の亀井算 拾、五（浮木は不安定な生活のたとえ）

聞く人も心で五わり引いておき 拾、九（話半分と同じ）

そろばんを詠める

節季の息子算盤に乗 武、初（節季、おおみそかの総決算、支払いを済ますので息子も大変）

そろばんへ乗せれば人も怖い物 武、五

妹にして置もそろばん 武、六（まだ大っぴらにはできないので、妹にして置く。現代でもよく使う手だ）

十露盤を伯父へ直して消えたがり 武、六（お説教ももうたくさん、早く消えたい）

そろばんを息子の顔へはじきかけ 武、八（父親がそろばんを弾いて息子にお説教）

駕から借りる見世のそろばん 武、八（芝居にこんな場面があった。今は思い出せぬが）

そろばんづくで立るにしきゞ 武、九（奥羽地方では、男が、思いをかけた女性の家の戸口に錦木を立てたとい

う。三十糶ほどの五色に塗った木で、女性が同意する場合は、これを家に取り入れたという。しかし句にあるように

そろばんづくとなるとそれは打算で、もう恋というようなものではない）

革足袋と出る足もそろばん 武、十

あづまくだりも今はそろばん 武、十五

やがて見よそろばんに乗るいなば雲 武、十五（稲の穂が一面に実って、今年は豊作だ）

そろばんをひかへたやうなだんご茶屋 初（そろばんの玉とだんごはよく似ている。特に江戸時代の玉は）

十露盤へしたむ小原のせわしなさ 初（能ひ気色なりくの前句付がある。解釈は不明）

遠乗にそろばんのいる事も有 二

色男ちとそろばんはにちう也 二（女にはもてる色男も、そろばんを弾く方は未熟だ）

そろばんをわきへはさんで隙な事 一〇

そろばんを菅文なげて置なをし 一三（店の帳場で計算していると乞食が来た。一文投げて、計算のやりなおし）
おやのそろばんをむす子は破さんする 一二（道楽息子が親の身代をつぶすのである）

跡乗にそろばんの入る十五日 一四

そろばんでもらへば嫁もげびるなり 二三、三十（持参金つきの醜女）

そろばんを出して三度目止めにする 二四（広島の隣の山口の錦帯橋はそろばん橋で名高い）

十露盤のお舟に乗せて丁稚ひき 二九（そろばんに底板がついているから上に子供を乗せられる）

薬礼のとき算盤でさしかげん 三四（高価な薬は使えない）

あかるみで十露盤かぢる白鼠 三九（主人に忠実な番頭を白鼠というが、これが日中そろばんをかじるのだからたまらない）

ゐんろうのとなりそろばん名が高し 四〇

生ま壁にそろばんづくの妻を持 四〇（新しい家に持参金つきの不粹な妻？）

二三間飛桁のある筋り柿 一一九（ところどころ食べられて、とびけたとなったそろばんのようなくし柿）

いゝ名付壁にそろばん算違ひ 四三（壁にそろばんは諺、野暮とか不粹の意、許嫁は、普通幼少のときから双方の両親が婚約を結んでおくから、大きくなってとんでもない女性に成長して計算違いになる）

初がつほそろばんのない内でかひ 四八（初鱈は高価で、小判をかじるようなものと西鶴も云っている。堅気の商人にはおよそ縁の薄い魚である。だから、そろばんの計算を気にしないような家で買うのである）

そろばんをはしごに建て直を登せ 四八

十露ばんの師匠に割れる弟子はなし 四九

十呂盤を置いて異見の割くとき 六六（お説教にそろばん）

かぞへ日にそろばんづくの嫁をとり 六八（年末の残り少ない日にそろばんづくで嫁をとったというのである。持

参金つき、醜女にきまっている）

そろばんを懸直で咄す国じまん 七二

たまたに来る客十呂盤に乗せぬ也 九三

十露ばんの枕栄花の夢は見ず 九六

そろばんづくならよしなし松が酔 九二

十露盤に向ふと丁稚九押し 一〇八（丁稚ならずとも皆こうありたいものだ）

肩に十露盤間違の割を付 一一〇

水茶屋で十露盤を出すいやな客 一一八（料理屋でも、キャバレーでも、現代でも嫌がられるのは当然）

十露盤の外で象牙を家根へ乗せ 一二〇

なま壁へそろばんで来るけちな嫁 一二一（不粹なところへけちときたら良い所なし）

十露盤を肩に息子の無勘定 一二一

十露盤づくならいきなし淫乱 一二三

十露盤絞り竹の子の尻の所 一二五（そろばん絞りは、そろばん玉を並べたような絞と模様で、手拭に多い）

十露盤で差引をする塩問屋 一三三

かた木な親父十露盤で薪を割 別篇中^⑩（堅気をかた木にしたから薪割が面白いのである。狂歌にはこういのがた
くさんあった）

うつくしい下女そろばんへのせておき 拾、二

そろばんで喰ってる人に夜具の事 拾、八

そろばんの師匠目貫のうらにすみ 拾、九（繁華で人通りの多い通りに商店が建ち並び、そこから小僧がそろばん
を習いにくる。だから師匠は目貫の裏に住んでいるのである）

姉始めばちくもので片付ける 傍、四

そろばんがたけて世間へ義理をかき 万句舎、宝曆十三（計算高いだけに世へ義理をかく、金があっても行くべき
所へ行かないで世間を狭くしてしまった）

そろばん玉を詠める

玉のうごかぬ庫裏の十露盤 武、四（お寺のそろばんは動きが悪い）

番頭新造十露盤に合ぬ玉 九九、一二一（番頭と年若の女郎、そろばんに合わぬ）

梅玉のそろばん二十五けた有 二〇（そろばんの歴史を考える上で重要な句、そろばん玉が梅玉で二十五けた）

歯のぬけたそろばんのある村しちや 四〇（ところどころに玉が抜けているのを歯の抜けたそろばんと表現すると
ころが面白い。都会の質屋でないのだからそれで十分）

福神は一とけた置の御ゑん日 六六

和算を詠める

勘定づくの馬でよめ入 武、二

欠^{あくび}して胸算用を消しておく 武、十七（胸算用は暗算のこと）

胸算の顔は眼玉がぱちぱち 一六三（現代の暗算は頭の中にそろばんを写象して計算をする。当時の暗算法については知れない。が、目玉がぱちぱちとあるところを見ると、現代式の暗算も行なわれていたのかも知れぬ）

割れそうもないのが并^{なち}ぶま^ち子^ござん 七八（まま子立てのこと、実子と継子を並べて、実子に相続させるために継子を落して行く計算法、塵劫記^⑧の計算法が初見）

とつさんがつい割かけるま^ち子^ご算 一二一乙（継母にとっては継子[〓]先妻の子と実子の区別がある。父親にとってはどちらも実子、子になるのである）

家台みせ大福餅の継子ざん 別下（継子ざんは碁石を並べるか、大福餅を並べてやれば良くわかるのである）

ま^ち子^ござん中の島のが三歩なり 拾、七

踊子とかげまをあげてま^ち子^ご立 拾、八（趣味の悪い遊びだ。踊子と、蔭間[〓]男色を売る少年[〓]オカマ、を並べて一人づつ落して行って最後に残った一人と遊ぶというのだから）

胸算のそばで新造畳ざん 一一二（かんざしなどを畳の上に投げ、畳の端からそこまでの畳の目を数えて、その奇数偶数によって吉凶を占うのが畳ざん、新造は畳ざん、旦那は揚げ代などの胸算用、对象的だ）

畳ざんじんこふ記にも見へぬ法 八二（塵劫記に畳ざんはない）

畳ざんたわけ塵劫記を尋ね 一二五（畳算とあったので、計算のことなら何でもわかると思って塵劫記を調べてみたというのである。無論どこを探してもない）

畳さん不慮の最期を蚤はとげ 別下（畳算をやられていたお蔭で、畳の上にいた蚤がつかまって殺された）

鼠算ちうくくでかぞへてる 九二（ねずみ算も塵劫記に見える）

引て加へて掛るのは鼠算 別、下

惣まくり算を乱して不礼講 一四（参両録にさうまくりの言葉がある）

豊さは杉形りにつむ御供米 一二一（塵劫記の俵すぎさんにある。俵をつんで何俵あるかを計算する。下に多く、

上に少く積んで行く）

方圓の業箱指曲物師 一二二丙（丸や角を扱うのは箱物、指物、曲物師だ）

天元は御代を治る法を立て 一二七（天元術のこと）

錦帯橋を詠める

若国の錦帯橋をそろばん橋と呼んでいる。横から見た格好が（そろばんを目の高さに上げて）そろばんに似ているからで、近松門左衛門の「国姓爺合戦」に既に紹介されており、大田南畝の「小春紀行」にも記事がある。川柳にも多く詠まれているので紹介しよう。

十呂盤で細に割てかけた橋 六六

破算してそろばん橋は掛直し 七二（錦帯橋も水害にあつてたびたびかけ直しているが、この句は破産して橋を掛直すようにやり直すことと、ご破算してそろばんを入れ直すことをかけた句である）

十呂盤橋は天作で懸たやう 八三

錦の帯は十露盤にかゝはらす 別、中

十ろばんに掛けて錦の帯が出来 九七

錦の帯を見へにする周防者 一二六（山口県の見栄にもなるう）

錦帯橋は天下の美橋でもある。広重も北斎も画いている。北斎の浄世絵は手に入らないが、もう十数枚が集った。現代の洋画家に画いてももらったものも私蔵している。

補

きつい後家算勘に迄届き 一一四（神功皇后の三韓征伐にかけた句である。算勘に目を配ってないと、夫の残してくれた財産がたちまちにして失ってしまう。だから後家もつきつくなるのだ）

四の五のと六部をとめぬ七里浜 一二二乙（六部は六十六部の略。日本六十六国の霊場を遍歴し、六十六部の写経を一部ずつ納めた法華の行脚僧のこと。数詞が巧に入っている）

おわりに

日本名著全集の「川柳雑俳集」の中から、そろばんに関係ある句を拾って「柳多留とそろばん」という論文を書いてもう二十年にもなる。阿達義雄著「川柳江戸貨幣文化」昭和二十二年、東洋館発行を古本屋で高価に買求めて、こういう研究もあるのだと知って始めたそろばん句の蒐集であった。三省堂から活字本で「柳多留全集」が複製されたのを期に、十巻までの中から選び出して解も入れてみた。間違った解釈もあるかも知れないし、難解のため手をつけずに置いたものも多数ある。しかし、私が発表しない以上はどなたもやっってはくれないので、勇をふるって発表した。「古語辞典」「江戸語大辞典」⑩「江戸川柳辞典」⑪には大変とお世話になっている。先に発表した「狂歌」も今回の川柳も珠算人による発掘ははじめてのことである。これがきっかけとなって珠算が見直されれば筆者の喜びこれに過

ぶるものはない。（八月一日記す）

注

- ① 珠算文化史——狂歌「富士論叢」第22巻第2号 昭和52年11月 第23巻第1号 昭和53年5月 富士短期大学。
- ② 万句合は、川柳評万句合の略。安五は安永五年の略、宝曆七年、寛政元年、初代川柳選
- ③ 二は二篇、柳多留二篇を示す、以下同じ、
- ④ 三囲社での雨乞の句に「夕立や田をみめぐりの神ならば」がある。
- ⑤ 神泉苑での雨乞の歌に「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとはまたあめが下とは」がある。
- ⑥ 拾は「柳樽拾遺」の略。以下同じ。
- ⑦ 筥は「やない筥」の略、初篇—四篇、天明三年—六年。
- ⑧ 五一加一、五二加二、五三加三、五四加四、五進が一十、
- ⑨ 七一加下三、七二加下六、七三四十二 七四五十五 七五七十一 七六八十四、逢七進一十（塵劫記による）
- ⑩ 武は「武玉川」の略、初篇—十八篇 五篇までは四季庵紀逸（元禄七年—宝曆十一年）の選、
- ⑪ 傍は「川傍柳」初篇—五篇 安永九年—天明三年刊
- ⑫ 別篇は柳多留の別篇
- ⑬ 吉田光由著、寛永四年初刊、江戸時代を通じてもっとも多く学ばれた算数の書。
- ⑭ 塵劫記のねずみ算は、
正月に、ねずみちゝはゝいでて、子を十二ひきうむ、おやともに十四ひきになる、此ねずみ二月には、子も又子を十二正づゝうむゆへに、おやとも九十八ひきに成。かくのごとくに、月に一度づゝ、おやも子も、又まごもひこも、月々に十二ひきづゝうむ時に、十二月にはなに程に成ぞ、
年中の分、合二百七十六億八千二百五十七万四千四百二疋也、以下略 岩波文庫本「塵劫記」二〇一頁以下参照
- ⑮ 「参西録」榎並和澄、承応二年版は現在しないが、寛文四年（一六六四）の再刊本が京都大学図書館にある、掃除法を説

明した後に、

古人掃除の法をさうまくりと名づけ、ひき算にせしかば、いとすみやかなりしかども、おろかなる心賦には其位にまどう事ある故、いつのころにや、右にしるす八算見一を工夫して、実の積と法の数をみくらべて、かならずこゑの出あふやうにおしへしこそ、少しことくどきやうなれど、世をすくふ心のふかき達人のしはざと、たれもいみじく申し合へりけれ、されども此法は或は声を覚え、或は一度にて引所にふたことこゑのかかりてむつかし

として、わり声によるわり算を批判し、商除法をすすめている、詳しくは「珠算算法の歴史」拙著一七〇頁以降参照のこと、

- ⑬ 「塵劫記」岩波文庫本 上巻第十二 六十六頁参照
- ⑭ 橋の起工は延宝元年六月二十八日（一六七三）十月一日竣工、十一月三日渡橋式を行なったという。横山健堂「錦帯橋國風景記」岩国町役場 昭和十一年七月発行 十二頁、
- ⑮ 上掲書によれば、延宝二年五月二十八日の錦川の暴風出水のため橋台二か所崩潰、拱橋三つが落ち、修理再築、十月竣工したという。
- ⑯ 「江戸語大辞典」前田 勇編 講談社
- ⑰ 「江戸川柳辞典」浜田義一郎編 東京堂出版